

轟沈

太宰府市

齊藤 一生

私が南方に向かったのは、昭和20年（終戦の年）の1月であった。戦況の報告はごまかしが多かったが、国民は生活の急迫や物資の急迫で大体の様子は感じていたようであった。南方へ派遣されるのが終戦の年となることを予想もしなかった我が部隊は、1月23日夜、宇品を出て、門司に向かった。

その日、解で沖に停泊している東城丸に移るため部隊が棧橋に待機している間、宇品監船部の原口を呼び出して別れを告げた。原口は中尉、中学、旧制高校以来の親友である。「おい、必ず潜艦にやられるぞ、心して行けよ」と原口から餞別の言葉を受け、東城丸に移った。あとの話になるが、7カ月後原子爆弾で原口は被爆した。戦後、原口は労働運動に身を投じ、総評議長として頑張ったが、放射能後遺症のために早死にした。

翌朝門司に着いて糧秣物資の積み込み等で日がすぎて、26日出航と決まった。船は石川島播磨造船所で進水したばかりのタンカー東城丸、1万800t。全長200m。船列は輸送船4隻、行き先はそれぞれ南方、上海、台湾、護衛艦は駆逐艦2隻、海防艦4隻である。隊長グループは飛行機で先発したと聞いていた。先頭輸送船の我が部隊は、古参の古川少尉が全航程の輸送指揮官に発令された。門司港に着き薄暗くなると、船員の家族らが棧橋に来て、迎える船員から乗船者の、航海のための糧秣や缶詰等を受け取って、別れを惜しむ姿が見られた。

翌26日午前6時、一路常夏の国に向け滑りだした。私はサロンのソファに腰をおろしながら、兵士の手紙の検閲をしたりして、時間を潰した。兵士のプライバシーを覗くことであり、いやいやながらの業務である。「母ちゃん、その後お変わりないですか。実ははっきりは言えぬが、いよいよ近く母ちゃんとも別れなければならない。ミー坊は元気ですか。いつも兄ちゃん兄ちゃんと言ってなついてくれたが、どんなに寂しがらう。3日前に、貰った金を送ったから、なにか絵本でも買ってやってください。僕が死んだらやっぱりミー坊は伯父さんの家にやってしまうの。母ちゃんひとりになるね。そう思うと、ぼくあまり死にたくないんだけど。でも仕方がない。お母ちゃん、さようなら。」私はそくそくとして胸を打たれた。

船団は一路、朝鮮西海岸向け進む。南方へ行くのに北上するのは遠回りであるが、接岸航行のためには止むを得ない。先頭を切るのは駆逐艦「野風」、ついで我らの東城丸。27日はたいた事もなく夕闇を迎えようとしていた。船団は朝鮮西海岸に向けて進む。木浦付近であろうか。零下18度。甲板の手すりには、氷のしぶきで、大人の手首ほどの氷の手すりとなっている。朝鮮西海岸での接岸航行はこのあたりで終わり、船は船首を西にとり、黄海を一気に横切ることになる。船速約18ノット。森本船長がしきりに右後方を振り返る。どうも門司を出てから、付けられてるようですね、ということらしい。対潜探知機のメーターにはなにか出ていませんか、と対潜監視室と問答が続く。古川少尉ほかサロン一同に緊張が走る。私は連中とト

ランプをやり、昼間の疲れからうとうととした。兵隊たちにもボチボチと船酔いが出ているとの報告が来ていたが、船に自信のある私は、船の揺れを揺籠の心地で眠りにいった。27日の24時から28日の28時までは私の順察当番である。

私はウトウトとした。時計をみると2時5分前。2時に順察の予定をしていたので、目覚めの正確さに満足して、タバコ金鶏に火をつけて二・三服した時である。ズシーンと、1万tの巨体が揺らぐような衝撃と爆発音とが身体を飛び上がらせた。瞬間、私の身体を冷たい戦慄がつつばした。私は二重扉を押し破るようにして外に飛び出した。暗黒の世界。右側に行く輸送船の船橋付近がめらめらと真っ赤な炎を出しているではないか。甲板の監視兵に、「おい、速やかに退避の服装で上甲板に集合するよう伝えろ」と怒鳴ってサロンに飛び込んだ。サロンの風呂で入浴中の古川少尉に告げ、装具を身につけ、軍刀を背中に負い、救命胴衣をつけ、甲板に飛び出した。

上甲板には数名の兵が、断末魔の火を吐いている右側輸送船を呆然と凝視している。兵隊に、「慌てるな」と言いながら私自身震えがくるのを覚えていた。再びブリッジに上がるとサロンの連中も皆、ブリッジから、沈み行く船を見ていた。皆声なく、ただ俄然速度を早めた機関室の唸りが轟轟と聞こえる。あ、「野風」が救助に来ましたねと言われて暗夜を透かして見ると、なるほど船団の中央先頭を誘導していた駆逐艦「野風」が東城丸と沈み行く船の間に進んで来ている。「野風」が東城丸の我々の眼から沈み行く僚船の吐き出す火炎を遮る位置に来たとき、ダーンと耳をつんざくような音響とともに「野風」の中央胴体に閃光一発、また二発。「野風」は真二つに裂かれ、マスト等は夜目にも高く中天に飛び、もうもうたる黒煙が一切を我々の目から遮った。数秒後サーッと海面に吸われるかのごとく降り注いだ黒煙が、また元のように視界を透明にしたとき、まず遠ざかりゆく、傷つける輸送船の輝くような火炎だけが闇の中。この間僅か1分足らず。

轟沈。我々を先導してくれた「野風」は一瞬にして黄海の底深く沈んだ。狂うがごとく凄まじい勢いで回転する機関室のタービンは、恐怖の叫びを挙げるがごとく殷殷たる唸りを響かせる。船はジグザグコースをとりながら、まっしぐらに、波を切る。船が方向を変えるたびに沈み行く船の火炎が右後方に、また左後方に移りながら遠ざかって行く。内臓まで凍りつくような暗夜の甲板に立ちながら、あちこちに走り回る駆逐艦や海防艦が投下する爆雷のはじけるような音を聞きながら、今に東城丸に来るのではと、いつまでも立ち尽くした。

操舵室に帰ると、森本船長は、間一発、魚雷をかわすことが出来ました。舳先スレスレでした、と言う話を聞きながら、百戦錬磨の従容さとはこれかなとシゲシゲとその横顔を眺めたことを覚えている。僚船の悪夢を見るような火の輝きは、走っても走っても視野から消えなかった。風は北風、魚雷に当たったら北側に飛び込めばよいのだ、と復習した。死。これでよいのだ。一切の忘却。この世の果てをいま通ろうとしているのだ。海に飛び込む。救命胴衣に縫りつきながら漂流5分以内。零下18度の水の中。寒さよりも痺れるような快い気持ちになるかもしれない。次第にぼんやりとしてくる知覚のなかで初めて家族のことを思うだろう。

約3時間走ったころ、微かながら水平線上に見えていた火炎は全く視界から消えた。ほのぼのと恐怖の夜は明けた。赤々と昇る太陽にこれほどの愛と慈愛とを覚えたことはなかった。昨日までの4隻の輸送船と6隻の護衛艦はなく、東城丸だけである。昼頃、神風と上海行き輸送船が追い付いてきたが、夕闇が迫る頃また離れて行った。右手は中国大陸、船は接岸航行で一路南下している。途中マカオ、海南島の三亚、仏印ユリン等に退避しながら、門司を出て、2週間かけて、昭南（シンガポール）に着いた。海南島を過ぎる頃、南十字星を見て訳もなく感動した。途中、B24、B29が飛来したが、我々の上まで来る前に機首を変えて飛び去った。我々も別に騒ぐこともなくシンガポールに着いた。

士官学校同期の連中が集会所で歓迎会を準備してくれて、宴半ばでみんな、ラバウル小唄を高唱した時はなぜか目頭が熱くなった。

この追憶はあと敗戦の捕虜生活と復員までの忘れられない歳月の激動もあるが、紙面の都合もありここで稿を終えることにする。